The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 地域振興整備公団のあらまし |
| Author(s) | 片岡, 誠 |
| Citation | makoto. 1975, 12, p. 3-3 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://doi.org/10.18910/86213 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 〝地域振興整備公団〟のあらまし

地域振興整備公団
理事　片岡　誠

辻野さんがわざわざ東京の公団の事務所においでになって、何か書けとおっしゃる。辻野さんには万博のとき、随分お世話になったし、また私が大阪府警に勤めていたときにも、時々本部長室に現れて、お話を楽しんだ仲だったので、何でもいいですかと尋ねたところ、何でも結構ですとのお話であったので、私の現在の勤務先の宣伝をさしていただくことにした。

地域振興整備公団というややこしい名前の公団である。一寸名前から仕事の内容が分りかねる。一体どこの地域ですか。と問われる。大阪ですか。関西ですかとも。それもそのはずである。国土綜合開発公団という分りやすい名前が、田中総理の日本列島改造に反対する人達の合意を得るため、国会でかえられたのである。公害をまきちらし、地価を暴騰させ、地域住民の生活を破壊するような、国土開発は、誰も賛成ではない。しかし、二十一世紀の初めに日本の人口が一億三千五百万人になるであろうと予測されているとき、日本人が、この狭い日本列島の上で、どのように住みつき、どのような生産や生活を営んでいくのが一番よいのか。二十五年後を見透して、計画を立てるのは、誰しも必要なことと考えるであろう。

エネルギーや資源に乏しく、日本は、世界の平和を前提し、貿易で立国して行く以外に生きる道のないのも明らかであろう。また、現在の過密化し、公害、交通難、住宅難等にあえぐ大都市に、これ以上人口が集中し、一方、過疎化された農山漁村の停滞と疲弊をそのまま残しておいていいとは、誰しも思わないと思う。むしろ過密化した大都市地域から地方に人口と産業を再配置し、この狭い日本列島を、何処でも住みよく快適な生活のできるように、造り直して行くことが必要と考えるであろう。そのために出来た役所が国土庁であり、その役所の実施機関の一つとして人口と産業の再配置をお手伝いするのが、地域振興整備公団である。具体的に言えば、三つの仕事がある。

まず第一に、十三年の歴史のある産炭地域の振興の仕事。エネルギー革命で斜陽になり、ついには閉山した炭鉱地帯に、工業団地を造成し、またその地域に進出する企業に融資をして、炭鉱離職者とその子弟に雇用の場をつくり、またその地方の経済を潤すようにする。第二に三年の歴史のある工業再配置の仕事。過密都市から過疎地帯へ、工場を移転する企業に融資をし、また移転先に工業用地を造成して受け皿をつくる仕事。第三に昨年からはじまった大都市圏以外の地帯に、工業団地だけでなく、都市造りをする。ニュー・タウンをつくる。それもベッド・タウンではなくて、職住近接の家庭と職場とショッピング・センターを含めた新しい街造りをする仕事。以上三つの仕事であるが、別の角度から言うと、デイベロッパーと金融機関とを結び付けた公団と言えよう。

大阪の方に分り易く言うと、府の企業局ー千里や泉北のニュー・タウンを造り、堺の臨海工業団地を造ったーの仕事と、開発銀行や中小企業金融公庫の仕事を一緒にした公団とお考えになればよいと思う。ただ、その仕事をする地域が、大都市以外の地域に限定されていることである。大阪に住んでおられる方にも御縁ができるのは、その方々が、工場を地方に移転されようとするときであろう。工場の敷地のお世話をし、また移転に必要な資金の融資をし、更に出て行かれる場所が、旧産炭地域であれば、設備資金と運転資金を、低利でお貸しすることになる。公団の大阪支部が、中之島センター・ビルにある。

戦後三十年にして、私達の生活は、戦前にとても考えられもしなかった豊かなものになった。しかし一方では、空は汚く、海や川も濁ってしまった。豊かな生活を保障する経済力は、同時に環境を破壊して行った。特に戦後の重化学工業の発達は、経済力の基盤であるとともに、環境破壊の最大の原因者でもあった。私達は欲張りである。石油化学工業の豊かな製品を毎日利用し、ジェット機や新幹線で旅行を楽しみ、自動車を乗りまわし、家庭電化生活を楽しみながら、きれいな空を、海水浴のできる海や川を、静かな環境を望む。

この矛盾を解決する方法は、二つだけあろう。一つは、科学と技術のもたらした公害は科学と技術の力で防止することである。省資源、省エネルギーのためにも廃棄物を最少限にすることである。他の手法は、産業と人口の分散と適正配置であろう。東京と大阪は、人口を半減した方がよいのかも知れない。大きいものは、よいものであるという考え方は、変ってゆくのであろう。といっても、文化的な生活の営める都市の規模は自らあるようである。人口十万の都市は、どこか欠けたものがある。若い人々をひきつける都市は、最低三十万都市であろう。百万都市が理想かも知れない。札幌、仙台、広島、福岡等の地方ブロックの中心に、百万都市、県庁所在地に三十万都市、そして、それらを結び付ける鉄道と道路と空路のネット・ワーク。県庁所在地都市と県内の主要都市、村落や工場団地を結ぶ鉄路と道路、そして、その間の豊かな森林・原野・耕地の美しい緑。

このような夢を画きながら、仕事をしている昨今である。